911368
.6
911. 368-W46-2ウ
1200500756420

始

911.368
W.46
2

富

士

海寧王國維撰

著者

北京圖書館藏

984
115

目次

昭和十一年
秋爽……一四
鯉……一三
葉牡丹……一四

昭和十二年
元日……一七
江の嶋……一〇
路地の家……一四
春五景……一三

櫻……二六
靑疊……二八
夏二景……二九
きのふけふ……三〇
秋三景……三二
寒威……三四
冬三景……三五
市井の冬……三六
劇場……三八
昭和十三年
裏富士……四一
目刺……五四
薄暑……五五

日光……五八
那須野……六三
修善寺……六七
氷……七二
雪もよひ……七四
雪……七五
微笑……七六
昭和十四年
我が家……八一
四季雜詠……八九
昭和十五年
京洛の春……九七

春光……一一〇
夫妻……一一一
切子燈籠……一一四
朝顔……一一五
芙蓉……一一七
秋の空……一一九
冬日和……一二〇
奉祝……一二一
さゞ波……一二四
追悼小集……一二六
私……一二八
年の始……一二九

昭和十六年

海苔……一三三
自然禮讃……一三五
富士の裾野……一三六
新緑……一三八
牡丹……一四〇
六義園……一四九
散歩……一五一
白國扇……一五三
兄……一五四
妹……一五五
銀河……一五六
清澄庭園……一六〇
新年……一六一

昭和十七年
梅　櫻……一六五
天長節……一六六
賀　宴……一六七
黨　風……一六九
岳　麓……一七〇
露の秋……一七二
遺稿を焚く……一七三
白　露……一七六
落　葉……一七七
旦暮禮拜……一八〇
昭和十八年
初　空……一八三
多　枯……一八四
白　魚……一八六
木の芽……一八七
暮　春……一八九
父母の忌……一九一
花菖蒲……一九二
銃後
日支事變……一九七
大東亞戰爭……二一七
跋……二三三

富士

裝幀　近藤浩一路

昭和十一年

秋　爽

九十九里の玩亭居にて

木瓜の實は茶色にまろし秋立ちぬ

さく〳〵と鳴るかに近し天の川

しろがねの日に風ふるゝ秋の空

鯉

室町三越屋上園

水冴えてカーヴす鯉の白々と

泳ぎ來る鯉にさゞなみ凍るかも

葉牡丹

日比谷公園にて

うごきやまぬ狐は冬日照返し

葉牡丹のうづまく紫紺寒ゝ充ちぬ

昭和十二年

元日

元日の照る陽や鷺の凍ること

元日や金星の野づら火を焚かず

江の嶋

落暉燃えて嚴冬の海ほてりけり

岩本樓

霜晨や富士見る幼女うちふるへ

岩屋道

松過ぎの寒さ白日たぎる潮

寒潮やざう〳〵岩を落ちる渦

寒潮にはじかれてかいづ釣れ上り

寒潮や針ぬくかいづ岩を搏つ

礁上の寒水海苔を湛へけり

天つ日や寒潮の光岩屋まで

路地の家

箱を出て初雛のまゝ照りたまふ

印刷代突然騰り雛過ぎぬ

妹老いぬ目刺燒く火の淨らかに

春五景

天上の眞日の焰や梅の花

紅梅のたそがれ星座とゝのはず

大富士の雪見つ木の芽嚙みすてぬ

咲きいでゝ月光ほてる薺かな

春深きしづけさ透きつ楢林

櫻

あだに寒き花に日輪照りまさる

ひや〳〵としばらく霧の樅さくら

花の夜の星空河鹿啼きそめぬ

花の雨溫泉に裸婦ひとり匂ひやか

女ひとり逆光線の花に立つ

花ざかり眞夜の川水ゆたかなる

青　疊

菊活けて夕立白き中に居る

桶に咲きし桔梗は秋や冷奴

夏　二　景

雨そゝぐ光の音の牡丹かな

鷲山

驚いどむ新樹の匂ながれたり

きのふけふ

選句すてゝしたゝる汗に切籠見る

日あらはに切籠の白さ照らし居り

朝顔は水輪のごとし次ぎ〳〵に

朝顔はゆるぎなし一句推敲す

珍しく貴餉に杯を取りて

なま鮭や擦生姜の匂ひ菊に似たり

秋三景

天つ日や臥牛に炎ゆる曼珠沙華

向日葵の金色冷ゆれ月の秋

茸山や巨石うしろに酒黄なり

寒威

蒼天の凍らんとして鷹翔る

碧梧桐先生の計

此の死是れ大瀧の氷まのあたり

冬三景

田家

寒木瓜が咲きぬ太陽みだれ照る

多摩川が見え山茶花に煙草買ふ

枯尾花日光富士を消しにけり

市井の冬

刀剣商のウインドー

一線の抜身水仙寂として

冬の星地震のあとに燃えさかる

湯豆腐や蝦夷の板昆布跳上り

近藤浩一路個展

畫に遊ぶサロンの冬を木瓜咲きぬ

劇場

歌舞伎座の絨毯踏みつ年忘

幕開いてひとり紅茶の雪夜かな

昭和十三年

裏富士

河口湖

別館ホテル

除夜の富士麓殘して雲となんぬ

年送る旅寢の湯婆ほてりけり

白樺に湖に雪飛ぶ初手水

湖上歳旦

公魚のよるさゞなみか降る雪に

雪の鴨わかさぎ逐ふか水にかくれ

湖上舟行

雪晴や影富士の濃さやゝにみだれ

小海にバスを待つ

富士ふゞき栂(つが)落葉松は冬霞

天の原初富士の吹雪ながれやまず

雲雀ヶ丘

初富士や漆黒の襞は雪をとめず

精進湖

旅館のみ松立てゝ部落冬霞

「湖畔の家」に泊る

初富士に雲なく樹海藻の如し

元日や夕照走る劔ヶ峯

夜の富士に殘照寒く照りもしつ

富士に映えし日は冬の夜に落ち込みぬ

オリオンは新春のひかり樹海の夜

オリオンが移る樹海の霜夜かな

劍ケ峰の下に金星凍てつきぬ

元日の夜を富士冷えに寐まりけり

烏帽子ヶ岳に登る

山雀の聲幽し山毛欅も雪も照る

日に近く雪深まりぬ山毛欅林

雪照りて山上の日はゆらぎをり

日光みちて樹影はげしき雪の上

パノラマ臺展望

日も富士も白き光の二日かな

本栖湖のさゞなみ見たり松の内

鳶啼くや日ほてりに嶽の雪を嚙む

天日に我が血ふえたり雪の嶺

新春の蝶々來たり雪の上

蝶いでゝあそぶ高嶺の二日かな

蝶の羽の雪の光にあわたゞし

山風に蝶うろたへて雪にとまる

てふてふは雪のかげろひ消えさりぬ

鳶啼くや炭焼くけむり樹海より

鳶の翼スケートの人ら遙か下に

雪の山照る日の山毛欅に鳶下りぬ

天はるかに大菩薩峠冬晴れたり

目刺

雪となりて火のうるはしさ目刺燒く

火にぬれて目刺の藍のながれけり

國菊祭幕間

朝さくら楓の下に煙草吸ふ

椅子にひとり緞帳しづかなる春夜

薄暑

店舗

浴衣いでし町や燕ながれたり

臺所

新月の光めく鮎寂びしけれ

鮎到來

蓼酢つくる妹が浴衣着そめたり

大虹の照り映ゆる輪を鵜がくゞる

柿若葉雨後の濡富士雲間より

橡の花葉越しの眞日に散りやまず

日光

明智平展望

八月のうぐひす幽し嶽の雲

うぐひすや翌立秋の嶽の雲

華嚴の瀧

一山の大荒れの瀧蟬鳴かず

華嚴大瀧蜻蛉は柵に眠りけり

華嚴大瀧失明の友に鳴りやまず

大飛瀑藍ひらめくは秋なりけり

白雲の瀧

女郎花岨に瀧見る老となりぬ

女郎花瀧白く土用明けにけり

戰場ヶ原

男體山土用明の雲動きやまず

白根男體雲やすまらぬ夏野行く

高原の水秋にして花あやめ

湯瀧

しぶき激し湖水の鱒の落ちる瀧

楢桂瀧の光芒みなぎりつ

蔦の花瀧と白さを分ちけり

那須野

冬枯れて那須野は雲の溜るところ

笹鳴のひとこゑありぬ那須の牧

荒野深く實生の松の冬凪ぎぬ

冬の夜の那須野は雲にまみれけり

「山樂」にて

父母の香の肌ひとり見て溫泉の冬

冬枯やなごりに浸る溫泉のあふれ

殺生石

白日は硫氣に染まず冬の原

大段山

冬山の笹に橇道消えにけり

笹山に那須嶽仰ぎ日向ぼこ

雪風となりし笹山眞青なり

那須五峰冬日に黒さつらねけり

修善寺

上京中の流水君に誘はれて
妻子同伴伊豆に遊ぶ

旅の友と旅に出て冬日大いなる

新井旅館

短日の左右に子あり溫泉のあふれ

前庭清池

冬の鯉幽く梵鐘ひゞきけり

一尾冴えて溪流を突く鯉ながれ

曾て一月中旬此家に泊りし折は

廊下の燈寒泉の梅咲きにけり

奥庭泉水

寒泉や島影に鯉とゞまらず

行く鯉の尾を曲げし姿美き寒さ

波たてずゆく大鯉の寒さかな

冬晴

養蜂園

日一輪薔薇一花冬寂かなる

山路

十二月蜻蛉の翅草に透きぬ

枯木山日のしたゝりの葦照る

富士見梅林

十二月梅少し咲きて空寂か

柿の木のしだれ照る實の冬凪ぎぬ

達磨山

富士冴えて山拓く人ら石擔ふ

天冴えて烈風に纖き富士を見たり

氷

氷上も風も殘照ばかりなり

氷上にかくも照る星あひふれず

雪もよひ

鴨飛んで風雲は日にはじけたり

オリオンやさしも雪雲なくなりぬ

雪

降りいでし雪や半襟買ひに戻る

いねし子の朱唇にうるむ雪夜かな

微笑

脱稿

心落ちて冬夜を紅葉もてあそぶ

湯豆腐や新月落ちて我が燈ある

湯豆腐や菜の花桶にたくましき

曲水新年號

水仙花校了の朱筆おきにけり

行く年やメロン高貴の薄みどり

昭和十四年

我が家

春

厨の朝

子の髪に櫛入るゝ我れ春めきぬ

いよゝ齒も乏しく白魚澄みにけり

竹に降る雪はげし目刺よく燒けぬ

二階眺望

春の月けふも枯木のうしろより

春の月枯木がくれに黄にけぶる

蒸し鰈子にむしる花過ぎにけり

夏

獨りゐて新茶汲む妹(いもと)いとまありぬ

晩酌

三日月の光りそめつつ鮎に箸つけぬ

夜空かなはじめてつかふ白團扇

父に似て白き團扇の身に添へる

物干臺にて

書を曝し文を裂く天の青きこと

死顔の寫眞いで〻紙魚かくれたり

そこら少し片づきしけふ蓮活けぬ

冬

臺所上流し

京菜解けば馬追蟲いでぬ雪が降る

人を見てすいッちよ凍るばかりなり

すいッちよの瞳のすみやうや雪の暮

凍え死ぬこそすいッちよの青さなれ

水仙花行(ぎやう)更へて文(ぶん)さやかなる

ひとりゐて鈴鳴らす子や雪の暮

降りしきる雪昏みもの遠ざかる

四季雜詠

春

東郷元帥邸

跫音もなく來ぬ牡丹芽を伸ぶる

暮れかねつ海棠しばし咲きやみぬ

夏

奥日光

鱒釣を朝日焦がしつ山若葉

水いよゝうるむたそがれ茨咲きぬ

冬

寒の巌鴨わだの日に啼きにけり

上枝(ほつえ)下枝(しつえ)に頬白はずみ氷照る

江の嶋

潮鳴りや霜晴の椿花を見ず

寒潮の海苔ふくむ蒼さザヽと岩に

新年

枯木照り元日の煙草手に白し

昭和十五年

京洛の春

西村家

第一夜明けて加茂川燕鳴く

朝餉遅しなか〳〵霞む東山

比叡山

大講堂うぐひす啼かず花咲かず

遅き日の根本中堂こゝに在りぬ

御衣御加持

修法幽し絶えず春ゆく火炎とぶ

竹秋ややゝにタづく不滅の燈

坂本・官幣大社

山冷に御簾みな黄なり遅櫻

霞冷えて湖の夕浪魚を打つ

瀧亭

濡れ石にある雪洞の夕おぼろ

圓山公園

花過ぎし籌平野家夜空濃き

宿に歸りて

春月は御所かも加茂の水ながれ

實相院

春を惜む北山しぐれよき庭の

池に浮いて鮒ひら〳〵と春暮るゝ

書院

白木蓮の光さし入らず坐して見る

岩倉公幽居跡

花うら〻庭踏むわれら跫音す

花吹雪岩倉具視之れを見し

往生極樂院（國寶三體）

落花きこゆ觀世音菩薩鉢を手に

彌陀如來尨然と遲日照りたまふ

勢至菩薩合掌に暮る〻春寂か

寂光院

春を惜む心ほの〴〵塵拾ふ

平安神宮

桓武天皇御座しまし櫻枝垂れあひぬ

花の瀧と云はんも足らず枝垂れ來る

枝垂れさくら一つ摘みしは女なる

枝垂れつゝ色ふりそゝぐ花暮れず

神戸句會の席上鵲子君の遺族に會ふ

春や惜む少年少女手を膝に

奈良

花の鹿はこぶ脚線とゝのへり

花の鹿たま〳〵角をかざし來る

浅茅原

馬醉木純林臭し靜脈蒼きこと

歌舞練場

都をどり霞降る夜の篝燃え

月夜なりし都をどりを歸る影

万亭

万亭は土藏ある庭朧濃し

舞妓起てば枝垂れざくらの夜明なり

老妓ひとり春夜の舞の足袋白し

春を惜む姿や笛を吹く老妓

すでに十時となりぬ

春の月舞妓も眠る別れなり

南禪寺

五山凌ぐ巨刹は松の初夏なりけり

永觀堂

歩きては憩ひては水の若楓

銀閣寺

山の方に蛙ころ〳〵一つ鳴く

春光

夕照の赤富士となり梅幽し

芽生遅き土鉢の春日ことに濃し

湯豆腐や花凍る雨灯にみだれ

熱海万平ホテル

春潮や朝の食堂とゝのひし

海光や卓の沈丁花ハムエッグス

夫妻

今日も病院へ行く妻を見て

一つ残る白百合の乳房涼しけれ

うすものゝ冷りと乳房無き胸に

まどかさや片面は白茶白團扇

白團扇妻には貸さじ老けて見ゆ

浅夜ひとり隨筆を書く水打ちぬ

切子燈籠

掛けすての切籠の風や月の秋

ひとりあれば月は切籠に渡るなり

朝顔

北斗ありし空や朝顔水色に

朝顔ややす〳〵染みし紅淺黄

朝顔の白さよ紺は咲かざりし

朝顔の月夜に染みし絞なる

朝顔やきのふの花をまぼろしに

蔓持つて活ける朝顔紅さやか

芙蓉

双鶴の離れて芙蓉水に濃き

蒼天や芙蓉はさらに身に近き

空蟬や芙蓉落ちたる音閑か

芙蓉みな萎みぬ星座さやかなり

秋の空

秋の蟬よく啼き木瓜は實となりぬ

鰯雲いが栗の束手に荒き

冬日和

櫻田門附近にて

すめらぎの城壁の冬日雉子いでず

萩枯れて黄なりさゞなみ盈ち走る

皇紀二千六百年祝典の式場成る

天冬なり大いなる幕の御紋章

奉祝

一家團欒

皇紀二千六百年の小春柏餅

靖國神社

日は松にはじけて白し冬紅葉

お濠端

旗行列鴨ことごとく水にならぶ

式殿拜觀

冬凪ぎて勅語ひゞきし御空なる

馬場先門

菊一つ摘みし子兵に送るといふ

菊と籌冬夜を御所へすゝみけり

二重橋

大内山霜降る民の灯は絶えず

さゞ波

さゞなみは影をつくらず枯尾花

さゞなみの音たつらしも鴛鴦眠る

欅高し根笹を濡らす冬の雨

日比谷公園

花八つ手ベリカン老いて仄赫き

情炎は我れにあり冬の薔薇寂か

金鈍る三日月は霜かゝるらし

みぞれとはやさしき名なり積るかも

追悼小集

悼杉浦勝子夫人

夜の壁に故人の鏡雪や來る

水仙や冷たかりし名の紅晶女

筆蹟の美しき寒さ女なりし

私

花欲しき寒さ子の眼を見てたりぬ

湯豆腐や澄める夜は灯も淡きもの

年の始

元日や氷山と見ゆ大議事堂

破魔矢白し今日いまだ客に觸れず

昭和十六年

海苔

海苔掻の眼はをみならし圓き岩

次の岩へ海苔掻移り音幽か

搔くや海苔大和島根の青きもの

わづかながら搔きえし海苔の薄光り

海苔搔は他を見ず岩を見て去りぬ

自然禮讃

朴の芽や烈風の眞日に雲を見ず

石楠花や朝の大氣は高嶺より

富士の裾野

鯉幟岳麓の田植始まれり

沿道の家々

水車廻りあやめ咲かせて住みなせる

河口湖ホテル別館

雪解富士月夜を雲の湧きつ照る

雪解富士幽かに凍みる月夜かな

朝日平

大富士の稜線の野や時鳥

絶ゆるなき躑躅みし眼を富士に冷ます

落葉松や雌がこたへし時鳥

朝光の金刷く初夏の孔雀齒朶

うぐひすの聲さみどりや花卯つ木

雪解富士口紅卯つ木名に愛づる

花あやめ織き苔のかく解けし

明易き富士や木天蓼かくれ咲く

雪解富士木天蓼の葉に白さ見ゆ

木天蓼の花は誰れみる獨り見る

水楢や更紗卯つ木はほのめくに

花穂ひとつ一人靜の名に白し

ほとゝぎす一人靜を持ちかへる

富士吉田浅間神社

薫風や黄鶺鴒啼く水屋の巣

啄木鳥の絶えまを初夏の雲冷えて

雉子鳩の遠音や風のさくらんぼ

山中湖

郭公をおしつゝみ新芽吹きやまず

落葉松の果てなき風や閑古鳥

白日を月夜の聲や閑古鳥

いつまでも郭公やみそ空まどか

旅館屋上園

雪解富士盥にあまる鯉跳ねし

歸宅して

今朝活けて富士の木天蓼花散らず

新　緑

啼く皆深き郭公へ雨押しゆきぬ

いちめんに郭公の雨や朴の花

うぐひすや夕立のあとの落葉松に

落暉ほのと顔に照るらし梅雨の原

三日月の富士より冷ゆる新樹かな

牡丹

牡丹花の蕚押しひらき現はるゝ

脱稿のページよむ牡丹匂ふらし

壺に咲いて奉書の白さ泰山木

夏蜜柑よく吸ひし子の四肢匂ふ

鮎を燒くをんな秋草の浴衣着て

六義園

月の夜に在るごとき雨や額の花

紫陽花の雨を見てより林泉へ

さみだれや露盈つ松葉眼にあふれ

林泉や雨よくかゝる泰山木

泰山木くだつ霖雨や通し鴨

散歩

仰ぐ顔に陰影あらじ橡の花

葉裏葉影ざわめく風や橡の花

ゆきのしたかろ〳〵咲いてはなやげる

夕焼は映らず白きゆきのした

夏の月落葉照らして更けたらず

白團扇

白團扇けふも獨りをあふぐなる

端居

月光もいくとせかみし白團扇

兄

銀河ながれ絶食の心氣渺々と

小沼靜さんに謝す

白菊の粥かな秋のほの〳〵と

妹

病篤し活けし朝顔冷えまさる

入院

寢臺車秋雨に妹拉し去りぬ

秋の燈や癒えしにあらず居らぬなり

銀河

秋もやゝ凍りそめしか天の川

天の川冷え極まりてけぶりたつ

銀河よりまともの風や草の原

名月のいづる夕燒ひろどりぬ

水に映る松には見えず法師蟬

あめんぼのくづれず泳ぐ秋日かな

木もれ日は移りやすけれ水引草

朝顔の色を忘れし白さかな

打水の日を截るしぶき花芙蓉

啼くも飛ぶもいらだつ蟬や花芙蓉

清澄庭園

かすかにも芝掃く音や浮寐鳥

舟に居て松の手入や冬霞

水中の日を見てあれば笹鳴す

水ふくみて鶴日を仰ぐ冬至かな

行く年や尖りて若き蘆青し

新年

葱も見つ元日の道まつすぐに

昭和十七年

梅　櫻

圓覺寺

梅散るや鵯啼いて巨刹雨さやか

鎌倉より戻りて

紅梅や盆の破魔矢に切火飛ぶ

花冷に欅はけぶる月夜かな

天長節

天長節たそがれ茨の花もみえ

賀宴

六月芝の料亭「嶮峨野」にて還暦の宴に入るまで夕の庭芝に遊ぶ

夏萩や六十一の涼しくて

夏萩を見る友紹襟くづれざる

紫陽花や晴れつゝ雨氣の筧鳴る

紫陽花や黒の紹羽織しつとりと

宴席

いたゞきて薫風に坐す朱の褥

その歸途

パナマ帽月に被れば若しといふ

薫風

二度跳ねて鯉のけぞりぬ蓮浮葉

岳麓

雪解富士蓮華躑躅に濡れにけり

雪解くる雲のむらだち天の富士

富士はだけて雪解光りや天の原

雪解富士國原青さみちにけり

富士は雲に沈みあやめの濃紫

露の秋

朝顔やひとり見る空ほの匂ふ

お茶の木は一つの花の良夜かな

十月下旬三溪園に遊ぶ

月光りつ睡蓮しぼむ秋のくれ

遺稿を焚く

野に出でゝ亡父の粉本を處理す

空は雲の秋や畫稿に火を移す

秋風や畫稿焚く火に刷毛も燃ゆ

秋風や火中の鶴の嘴裂けて

獨活の實や雲の夕映身に染まず

鵙啼くや畫稿焚く火の野に盡きて

畫稿焚きて歸る空手や秋の暮

武藏境の青陽人居を辭去す

父の畫稿焚きてぞ歸る望の夜を

白露

妹が遺愛の細棹を見て

露ふるも三味線彈けぬ月夜かな

妹が一周忌の逮夜に
花籠を戴きし文女樓へ

燈も秋のつるむらさきやつゆ女の忌

落葉

銀杏全く黃葉して散らず天の原

文學報國會への途にて

首相官邸に在りや銀杏は落葉照る

銀杏落葉掃かれつ照りつ押し移る

林泉

水照るや枯れつゝ萩のうすみどり

浮雲やわびすけの花咲いてゐし

日は雲の絶間より鵙の啼く落葉

句會出席

舊友に逢へるかも落葉降る道を

清水谷公園散策

氷チカ〳〵照りつゝ松にさゝ鳴す

旦暮禮拜

靈燭を供へぬれば

精靈の凍みる雪夜を牡丹照る

昭和十八年

初空

松は霜に葉を逆立てゝ年明けぬ

元旦の老松(らうしやう)皮を固めけり

近隣

初空やしなびぬれども木守柿

冬枯

小野燕子氏急逝

牡丹花の闘心こめて霜に伏す

主人みまかりし蓼山荘を訪ひて

泰山木嚴冬花は無かりけり

庭枯れて遺愛の一間炭火燃ゆ

去るに及びて再び白木の位牌を拜す

戒名の筆跡の美さ雪や來る

白魚

臺所

掛け水に白魚てら〳〵ほそりけり

亂れあひてかたちなく照る白魚かな

白魚すゞし尾鰭の線も光なる

木の芽

凧唸り孟宗竹の青さゆるみなし

紅梅やゆく水光る櫟原

木の芽時山毛欅鳴つて風吹きながれ

木の芽こぞり人を食ふ眼の山鴉

樹を抱けば妙なる冷えや朧月

暮春

山吹や暮れゆく水のとゞまらず

山吹の冷えつゝ黄なる月夜かな

芝「嵯峨野」清興

春や行く閑庭の齒朶眞青なる

春や徂く降らば欅の夜の雨

父母の忌

卅三回忌

母といふも我が知るのみや宵の春

曲水四月例會に臨めば席題「花鳥忌」とあり

父が忌の句座つくられて花の雨

花菖蒲

日の出前にぬれしや菖蒲花ゆたか

楢も黄楊はむかしになりぬ花菖蒲

花菖蒲鷺飛んで雨線を引けり

書齋

菖蒲咲けり桶に紫白の遲速無く

橡咲いて一天蒼さばかりなる

銃後

日支事變
大東亞戰爭